研究ノート

泊園文庫とその貴重書

吾　妻　重　二

一

江戸時代後期の文政８年（1825）、四国高松出身の藤澤東畡によって大阪に開かれた漢学塾「泊園書院」は、江戸官学に対する大阪庶民の私塾として栄え、幕末期には懐徳堂をしのぐ大阪最大の私塾として多くの学徒を集めた。

書院はその後、東畡の子の南岳、南岳の子の黄鵠と黄坡、黄坡の義弟石濱純太郎により、昭和前期に至るまで120余年にわたる長い歴史を刻む。漢学者・漢詩人として当代一流の教養人だった彼らのもとには大阪のみならず全国各地から学生が雲集し、有為な人材として各界に巣立っていった。倫理や政治、歴史、文学、芸術など人文学の幅広い分野にわたる人間教育の場として名声を保ち、長く大学をもたなかった大阪における教育文化の一大中心となったのである。

書院の建物は戦災により焼失し、昭和23年（1948）、黄坡の死去によりその旺盛な活動に幕を閉じる。しかし、幸いに戦禍を免れた膨大な蔵書は昭和26年（1951）、黄坡の子で小説家の藤澤桓夫および石濱純太郎の努力により、ゆかりの深い本学に寄贈され、「泊園文庫」として総合図書館に収められた。また、これらのことが機縁になって昭和36年（1961）、「泊園記念会」が本学の東西学術研究所内に設立され、以後、毎年一回、「泊園記念講座」として公開講演会を開催している。

泊園記念会は昨年（2010）、開設50周年を迎え、第50回泊園記念講座として国際シンポジウム「東アジアの伝統教育と泊園書院」を本学以文館で開催した。これにあわせて「藤澤東畡・南岳・黄鵠・黄坡と石濱純太郎の学統」と題する特別記念展示が２会場に分けて開催された。

このシンポジウムの開催にあたって、かつて大阪市内の泊園書院跡地に立てられていた「泊園書院址」の石碑が本学の以文館北側に移置されたことも特筆される。石碑の傍らに立てられたパネルの説明は筆者の起稿にかかるもので、次のとおりである。

> 泊園書院は江戸時代後期、藤澤東畡により大阪に開かれた漢学塾で、その子の南岳、南岳の長子黄鵠、次子黄坡、および石濱純太郎の尽力により幕末から明治・大正・昭和にかけて隆盛、大阪の教育・文化の発展に大きく貢献した。書院の遺構は残らないが、その蔵書「泊園文庫」は昭和二十六年、本学図書館に寄贈されている。
>
> この碑は、かつて大阪市竹屋町（現在の島之内一丁目）にあった泊園書院の跡地に、黄坡の子の桓夫により建てられたものである。このたびここに移置し、本学における中国学・東洋学の源をしのぶよすがとする。
>
> 平成二十二年十月二十三日
> 関西大学東西学術研究所
> 泊　園　記　念　会

ここに記したように、泊園書院は黄坡や石濱純太郎を通して本学の誇る中国学・東洋学の源流をなしている。

さて、泊園文庫は一万六千五百点余、二万数千冊にのぼる書籍を中心に、東畡以下、泊園院主の自筆稿本約六百二十点余、さらに印章百七十顆、多数の書画を含む近世文化の一大コレクションになっている。このほかに同文庫には収められていないもので本学総合図書館や東西学術研究所に蔵される書物も多い。

本稿ではこれらのコレクションのうち貴重書の一部について紹介してみたい。

二

○『唐詩紀事』

『唐詩紀事』は唐代の詩人につき、その詩や小伝、逸話などを収めた書。本書によって後世に伝わった詩人と作品は多く、唐詩研究の重要資料となってい

『唐詩紀事』81巻32冊　宋・計有功編
覆宋刊本　明・文徵明旧蔵　明・祁氏澹生堂旧蔵

る。本書は版式から見て明の嘉靖年間、張子立によって刊行された版本であり、我が国では所蔵の稀な貴重テキストである。

本書はもともと明代中期の文人、文徵明（1470－1559）の旧蔵だったらしく、その蔵書印「文徵明印」があるほか、巻末に文徵明のものとおぼしき識語を附す。

さらに本書は、蔵書印「澹生堂経籍記」から祁承㸁（1563－1628）の所蔵に帰したことがわかる。祁承㸁は万暦32年（1604）の進士で、蔵書楼を「澹生堂」と称した。その『澹生堂蔵書目』巻十四・集類第八・詩文評・詩式に「唐詩紀事　二十冊　八十一巻　計有功輯」とある。泊園文庫本と冊数こそ異なるが、泊園文庫本は清代に改装されたものらしく、『澹生堂蔵書目』に著録された『唐詩紀事』がほかならぬ本書であると考えられる。さらに巻頭には藤澤南岳自身の「七香斎珍賞」印があるが、これは本書が南岳によって特に愛蔵されていたことを示すものである。

『宋元資治通鑑』64巻16冊　明・王宗沐編　刊本
清・王鳴盛旧蔵

○『宋元資治通鑑』

『宋元資治通鑑』は明の王宗沐の撰、路進の校で刊行も路進によると思われる。杜信孚『明代版刻綜録』（江蘇広陵古籍刻印社、1983年）や瞿冕良『中国古籍版刻辞典』（斉魯書社、1999年）によれば、路進は明末の人で崇禎元年（1628）の進士、崇禎10年に『資治通鑑』294巻を刊行したというが、本書『宋元資治通鑑』も『資治通鑑』の刊行年にほど近い頃に出版されたと考えられる。

本書の特筆すべき点として、清代を代表する考証学者の王鳴盛の蔵書印「王鳴盛印」、「西莊居士」が押されていることが挙げられる。王鳴盛は江蘇嘉定（上海市）の人、乾隆12年（1747）の進士で、『尚書後案』31巻や『十七史商榷』100巻を著わした鴻儒である。

『鐔津文集』20巻５冊　宋・釈契嵩撰　日本五山版
（元至大年間刊本覆刻本）

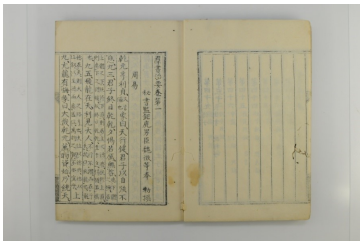
○『鐔津文集』

『鐔津文集』は北宋の禅僧、契嵩（1007－1072）の著。契嵩は藤州鐔津（江西省）の人。仁宗から仏日明教大師の号を贈られた高僧であり、儒仏一致を主張した論客として知られる。他に『輔教篇』の著があり、『鐔津文集』とともに京都の五山禅林でよく読まれた。

『鐔津文集』の版本には元の至元本、至大本がある。また、我が国の五山版にも陳孟才刊本と元至大刊の覆刻本があることが知られている。本文庫所蔵本は、元の至大年間刊本を覆刻した五山版であり、川瀬一馬『五山版の研究』（日本古書籍商協会、1970年）によれば、刊行は鎌倉末期と推定され、完本は未見、三井家に端本の旧蔵が、台北大学図書館に零本の所蔵が確認されるだけだという。本書は伝存きわめて稀なテキストであり、日本出版史における重要な文献資料の一つといえよう。

○『群書治要』

『群書治要』は唐の太宗の勅にもとづき編纂されたもので、先秦から晋代に至る67種の文献から、政



『群書治要』50巻25冊　原闕３巻 林羅山増補２巻
唐・魏徵等奉勅撰　尾州本鈔本　藤澤南岳重校批評

治に参考にすべき文章を抜粋している。なかには今日現存しない文献の引用もある。本書は中国では早く失われたが、日本の金沢文庫に伝存しており、徳川家康が駿河で銅活字を用いて出版して以来、世に重んじられるところとなった。

本文庫所蔵本は、尾張藩が天明７年（1787）に整版にて出版した書籍を抄写したもので、林羅山による増補がなされている。これに南岳の校訂と批評が書き加えられ、巻末に南岳の識語がある。

同書について石濱純太郎はつとに興味を持ち、大正９年（1920）11月14日の「泊園書院学会」第六回例会で『群書治要』諸版本の展示会を開いている。『泊園書院歴史資料集』206頁参照。また石濱純太郎『支那学論攷』には同書に関する詳細な論考数篇が収められている。

『徂徠山人外集』11巻９冊　荻生徂徠撰　写本

○『徂徠山人外集』

荻生徂徠（1666－1728）は江戸に生まれ、苦学の後、元禄９年（1696）、柳沢吉保に見出されてこれに仕え、将軍綱吉にも謁見して名を成した。朱子学に反対し、言語の考察にもとづく「古文辞学」の立場から中国古代思想の研究を行なうとともに、詩文の制作にも積極的にとりくんだ。門人に太宰春台、服部南郭、菅甘谷などが出て、いわゆる護園（けんえん）学派を形成したことは良く知られるとおりである。泊園書院は徂徠学を受け継いでいる。

服部南郭『物夫子著述書日記』には、『読荀子』４巻・『読韓非子』３巻・『読呂氏春秋』４巻など６部の書が未定稿であったと記されているが、これら３種、計11巻は『徂徠山人外集』や『徂徠外集』の名で、写本により世に伝わっていた。

本文庫所蔵本は、こうした『徂徠山人外集』11巻の中で特にすぐれた写本であり、今中寛司・奈良本辰也編『荻生徂徠全集』第３巻（河出書房新社、1975年）所収の『読荀子』『読韓非子』『読呂氏春秋』は、すべて本文庫所蔵本を校訂に使用している。巻末の今中寛司氏による解題には、本文庫所蔵本『徂徠山人外集』に関する詳細な解説が見える。

また、同巻の月報である柴田実「徂徠学と泊園文庫」は、徂徠学の顕彰に泊園書院が果たした役割につき実例を挙げて説明しており、本書に代表される泊園文庫蔵の書籍が徂徠学や近世・近代における大阪の学術研究に欠かすことのできないことを物語っている。

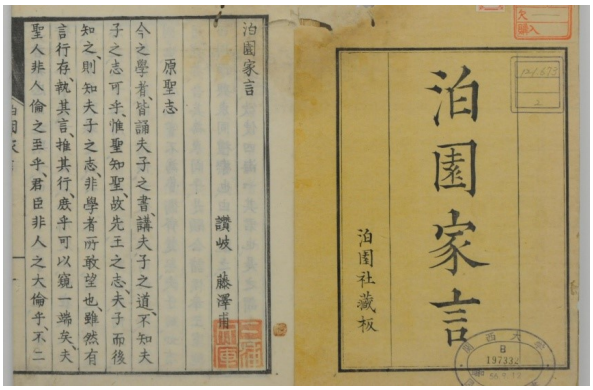
三

泊園書院院主すなわち東晦・南岳・黄鵠・黄坡四先生の著作としては以下の文献がとりわけ注目される。

『東晦先生文集』10巻８冊　藤澤南岳編
明治17年（1884）刊

○『東晦先生文集』

東晦の文集。南岳の編。片山沖堂および土屋鳳洲序、稲垣秋荘跋。漢文。訓点は句点のみ。同書巻１所収の「榮觀録」と「思問録」は、それぞれ関儀一郎編『日本儒林叢書』（東洋図書刊行会、1929年）の第３冊および第４冊に活版で採録されている。



『泊園家言』　１冊　藤澤東畡撰　藤澤南岳編
元治元年（1864）序刊

○『泊園家言』

東畡の主要な論文を文稿中から取り出し、１冊に編んだもの。漢文。訓点は句点のみ。長沢規矩也編『影印　日本随筆集成』第11輯（汲古書院、1979）に影印を収める。

『先春社唫稿』５巻　存巻１・巻５　２冊　写本

○『先春社唫稿』

巻１および巻５の２冊のみ現存する。唫は吟と同義。先春吟社は文政12年（1829）５月の結成で、宝暦８年（1758）頃に作られた木村兼葭堂の「兼葭堂会」、明和２年（1765）に開かれた片山北海の「混沌社」、および安永６年（1776）に始まる篠崎小竹の梅花社に、人的にも時期的にも接続する詩文結社である。本書には東畡以下29名の社友姓名、詩稿、掲題などを収め、江戸時代後期における大坂の詩社資料として貴重である。水田紀久「東畡先生周辺」（『近世日本漢文学史論考』所収、汲古書院、1987年）、吾妻『泊園書院歴史資料集』を参照されたい。

『辨非物』１冊　写本　藤澤東畡撰　自筆稿本

○『辨非物』

江戸時代後期、朱子学を奉じていた懐徳堂の儒者、五井蘭洲が『非物』を書いて徂徠を批判し、中井竹山が『非徵』を書いて徂徠の『論語徵』を批判しており、徂徠学を承ける東畡はこれらに反論するために本書を著わした。漢文。訓点は句点のみ。現在、長谷川雅樹解説「関西大学東西学術研究所資料集刊22」（関西大学出版部、2001年）として影印出版されている。

中井竹山『非徵』書入れ本　８巻４冊
天明３年（1783）刊

○中井竹山『非徵』書入れ本

東畡の書入れ本。東畡は前記の中井竹山『非徵』を駁するためにこれを克明に読み、研究した。欄外に小字でびっしりと記された書き入れがその真摯さを物語っている。

○『七香斎文雋』

南岳の文集。黄鵠の跋あり。漢文。訓点は句点のみ。ここに収められたのは、実は南岳の書いた文章のごく一部にすぎず、これ以外に膨大な自筆稿本が泊園文庫に蔵されている。

『七香斎文雋』１冊　藤澤南岳撰　線装　活版
大正３年（1914）出版

『論語彙纂』５巻３冊　藤澤東畡・藤澤南岳撰
明治25年（1892）出版

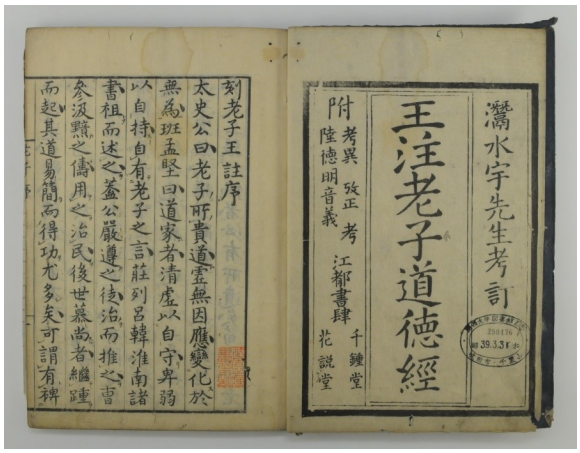
○『論語彙纂』

『論語』本文を「教學」「德行」「政治」「禮樂」「時命」「品藻」「警誘」「志氣」「動止」「毀譽」の十類に分類し直して掲載し、中国と日本の主要な注を引用するとともに、東畡と南岳の注記をつけ加える。泊園家学における論語注解の集大成といえよう。小牧桜泉、小野湖山、稲垣秋荘の序、土屋鳳洲の跋がある。

『評釈韓非子全書』20巻10冊　藤澤南岳校疏
明治17年（1884）出版

○『評釈韓非子全書』

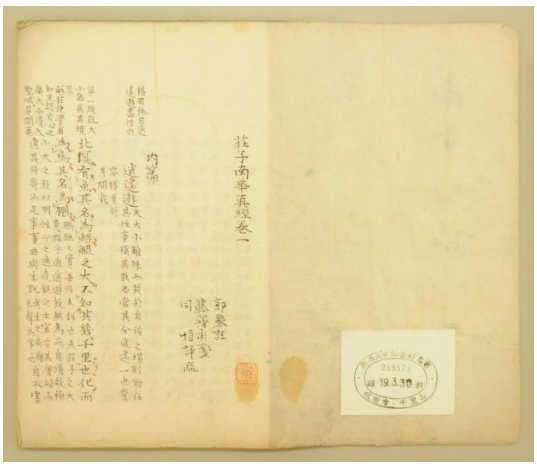
徂徠学派を継承する泊園では、経書の講究にとどまらず、子書に対する研究も盛んであった。本書は太田方の『韓非子翼毳』など先行注釈をふまえつつ詳細な注と評（欄眉）を加えたもので、日本の『韓非子』研究を代表する労作であり、諸子研究における学識の高さをよく示している。明治17年７月の南摩羽峯序あり。



『老子道徳経』書入れ本　２冊　宇佐美灊水校訂刊本

○『老子道徳経』書入れ本

泊園書院では儒家の経書のみならず、諸子文献についても研究を怠らなかったことは上述したとおりである。本書は徂徠門人宇佐美灊水の校訂本により『老子』を研究したもので、欄外に南岳らによる多くの書き込みがある。

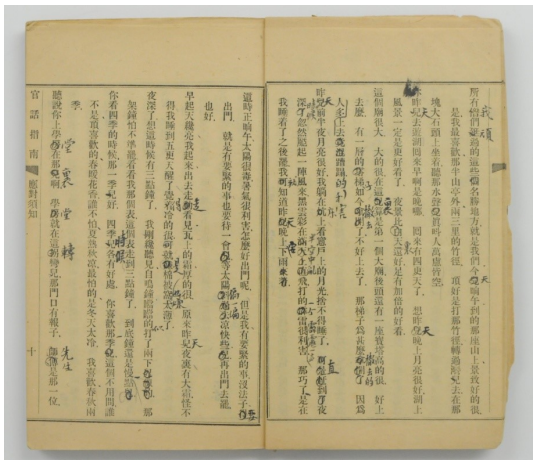


東畩箋・南岳疏『荘子南華真経』10冊
藤澤東畩箋・藤澤南岳疏　自筆稿本

○東畩箋・南岳疏『荘子南華真経』

『荘子』の注釈。東畩が「箋」としてまず注をつけ、それを南岳がさらに「疏」のかたちで敷衍補説している。

東畩の箋が本文中に配されるのに対し、南岳の疏は、本文中に「恒按」という按語形式で記されるほか、鼇頭にも朱書や墨書による疏が大量に書き入れられ、驚嘆すべき詳細さである。本書は『評釈韓非子全書』と並ぶ泊園諸子学研究の白眉であり、日本における『荘子』研究を代表する著作といえる。東畩から南岳へと引き継がれる泊園の学統を体現した著作でもある。



『官話指南』書入れ本　1冊　清・呉啓大　鄭永邦撰
光緒26年（1889）福州美華書局刊

○『官話指南』書入れ本

黄鵠の書入れ本。黄鵠は明治34年（1901）から2年にわたって清国に留学し、南京の東文学堂で中国語を学んだ。本書はその際に用いられた中国語教科書で、書き込みの多さが黄鵠の勉学ぶりを物語っている。いわゆる南京官話の貴重な資料でもある。

『古文孝経』書入れ本　1冊　漢・孔安国伝　太宰春台音
寛政6年刊本

○『古文孝経』書入れ本

黄坡の書入れ本。の問答体によって孝について述べ、儒教の入門必読書として広く読まれた。古文と今文の2系統のテキストがあり、『古文孝経』は中国では失われたが、日本に伝来し、徂徠門人の太宰春台によって校勘、刊行された。本書は春台校勘本で、欄外におびただしく記された書入れは、足利本との校勘や中山城山の説の引用、注釈など、きわめて詳細である。

ついでに述べておけば、本学図書館には『孝経』関連文献の貴重コレクション「玄武洞文庫」が蔵されている。その収集者の田結莊金治（たいのそう）の祖父は、大塩平八郎の洗心洞門人で東畩・南岳の知友だった田結莊千里である。

『大学注疏』1冊　藤澤黄坡撰　自筆稿本

○『大学注疏』

『大学』はいわゆる「四書」のうちの一書であり、朱子学の普及とともに最も盛んに講ぜられた書物の一つである。朱子学に批判的だった泊園書院でも『大学』は重視され、東晦撰・南岳編の訓点つき『大学定本』１冊が講学のテキスト用として泊園文庫に伝わっている。

本書は『大学』につき、徂徠の説を敷衍し、朱熹の説に反駁を加えて古義を究明しようとする立場に立つ。泊園の経学研究のあり方を示す書物として重要である。

＊以上に紹介した文献のうちの４点については本学非常勤講師の城山陽宣氏に解説を依頼し、筆者が補訂を加えた。また、下記の吾妻重二編著『藤澤東晦・南岳・黄鵠・黄坡と石濱純太郎の学統』をも参照されたい。

参考文献

壺井義正編『関西大学泊園文庫蔵書書目』（関西大学出版部、1958年）。

壺井義正編『関西大学泊園文庫蔵書書目　索引之部』（関西大学出版部、1960年）

壺井義正「泊園文庫」（『籍苑』第20号、総合図書館開館記念特集、関西大学図書館、1985年）

吾妻重二編著『藤澤東晦・南岳・黄鵠・黄坡と石濱純太郎の学統』（泊園記念会創立50周年特別記念展示 展観目録、関西大学東西学術研究所、2010年10月）

吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集―泊園書院資料集成１』（関西大学東西学術研究所資料叢刊29-1、関西大学出版部、2010年10月）

吾妻重二「関西大学泊園文庫自筆稿本目録について」（『アジア文化交流研究』第５号、関西大学アジア文化交流研究センター、2010年２月）

吾妻重二「泊園書院と関西大学」（『関西大学年史紀要』第20号（関西大学学術情報事務局、2011年３月）

（あづま　じゅうじ　文学部教授）